

消息窮通皆有運 消息窮通 皆 運有り

莫言墮戸不驚雷 言ふこと莫かれ 戸を墮りて雷に驚かずと

*原文は岩波古典文学大系本に拠るも五句目の「応」は、前掲の隋氏の考察文にある指摘に従い、「夜」を「応」に改めた。(注4)(三十二頁) (訓は筆者試読)

この詩は既に拙稿(注5)で、『白氏文集』「1053歳暮」との比較を通して論じたが、その中で本稿に関わると思われる箇所を次に再掲する。

この詩の詠作事情は、仁和五年讃岐守として赴任中のもので、時に四十五歳である。また道真に関わるものとして、その一年前六月橘広相の阿衡問題が紛糾し、これについて基経を諫めるため十月ころしばらく上京したようである。(中略)道真のこの詩の詠作された時の心情としては、「中央政界」から隔絶された「無用者」としての自己認識が強かったと考えられる。第六句で道真の目が内へ向けられた時、「蔭」のイメージとして自分を強調整ざるを得なかったのではなからうか。

この第七句の発想は白詩によるのであって、この句の真意は次の八句と呼応させて考えるべきである。(中略)第七句の「運・不運は自分の関知するところではない」の両詩の類似発想は、白詩においては、「だから、くよくよ考えても何の解決策もでてこない。ならば酒でも飲んで気を晴らす以外に何があるう」と結ぶのである。しかし道真はそのようには詩内容を展開させていない。「だから、不遇に甘んじている自分も、また幸に転じることもあるのではないか、いやきつとあるはずだ。今の不遇な状況も自分の関知しないところで訪れた。ならば、